

# ミル経済学における静止状態の 必然性と当為性(2)

内 田 忠 寿

	内 容
第1章	序 説
第2章	静止状態の必然性
1	リカードゥの場合
2	ミルの場合
第3章	静止状態の当為性
1	当為論への転回——その契機 (以上第13巻第2号)
2	当為としての静止状態 ——内容とその吟味——
3	生活のオートと否定の経済思想
第4章	結 言 (以上本号)

## 第3章 静止状態の当為性(承前)

### 2 当為としての静止状態

—— 内容とその吟味 ——

(1)

われわれは上に、ミルにあっては人口問題における人間の態度の改善ということが、静止状態当為論への跳躍台となったと述べた。しかし、もとより経済社会の特定の一状態に他ならない静止状態が当為とされたについては、ミルの価値観からみて当為たるべき要素が、最初から静止状態の観念のなかに含まれていたと考えざるをえない。それは一方では、人口問題の存在によって理想社会の到来を非現実的とするマルサスの議論の裏返しであった。そこに18世紀啓蒙思潮のミルへの影

響があり、これはまた人口問題の解決を契機として理想社会の現実化へと動くべき思想の流れであった。また他方、ミルの観察によれば資本主義的動態のもとでの人間生活には否定さるべき要素があり、さらにその否定の背後にミルにとって最も積極的に尊重されねばならぬ価値が見えられていて、この価値の最もよく実現さるべき場所が静止状態だという認識が横わっているのである。これらの点を念頭におきながら、われわれは以下においてミルの静止状態の内容を観察し、それに対する若干の吟味を行なってみたい。

まず順序として、既述の人口問題における人間の改善の議論から、いかにして静止状態の内容へとミルが議論をすすめるか、その論理を見よう。さきに引用したごとく<sup>1)</sup>、ミルは、人類が協業および社会的接触から生ずる利益の最大限度を獲得しうるために必要とされる人口の密度は、最も人口稠密な国々においてはすでに到達されていること、そして、ある大きさの人口は、たといそのすべての人が食糧および衣服の十分な供給をうけているとしても、なお過度に稠密な人口でありうることを指摘していた。われわれは、この論述がなされた時期が19世紀中葉であることに、まず注意を払うべきであろう。私はここに約半世紀後にイギリスで展開されてくる適度人口(optimum population)論の萌芽を見出すことができると思う。しかし適度人口の学説がふつう生産力の最適度という経済学的観

点から主張されるのに反して、ミルの議論の特色は、人口のこれ以上の増加が人間の向上改善のためには不適當であるという、人間的、社会哲学的な観点からなされていることに認められる。

ミルによると、技術が向上をつづけ、資本が増加をつづけると仮定すれば、世界がなお人口の一大増加をうけ容れる余地があることは疑いない。このことは古く開けた諸国においてさえ当て嵌まる。けれども、ミルは、「たといそれが無害のものであったとしても、私は正直に言えばそれを望ましいと考える理由はほとんどないと思う<sup>2)</sup>」という。ここに、人口成長の停止が望まれるのは経済的理由によるものでないことがはっきりと示されている。それでは、人口成長の停止を価値とする積極的理由は何であろうか。私の解釈によれば、その理由として彼が考えているのは次の二つであって、いずれも、人間対自然の局面に関係している。すなわち、一つは人間生活における孤独の重要さと、その孤独を可能にする条件の問題である。そして、他の一つは、自然が自発的に活動する余地が残されていることの重要さ、或いは、自然破壊を防止することの必要性である。

まず第一の点について言えば、孤独というような観念が突如ここで現われてくることにひとりは当惑を感ずるであろう。しかしミルにとってこの観念の重要さはけっして皮相なものではなく、彼の思想の流れの底土から滲み出ているものである。彼はいう、

「人間にとっては、必ずいつもその同類の前におかれているということは、よいことではない。孤独というものが全くなくなった世界は、理想としてはきわめて貧しい理想である。孤独は、思索または人格を深めるために絶対に必要なことであり、自然の美観、壯観の前における独居は、思想と気持ちの高揚と——ひとり個人にとってよい事であるばかりでなく、社会もまたそれを持

たないと困るところの、あの思想と気持ちの高揚——を育てる揺籃である<sup>3)</sup>。」

孤独はこのようにして思索または人格を深めるために、換言すれば、人間の改善のために不可欠な要素と看做されている。しかもこの要素は、個人と自然との交わりを前提とする、というのがミルの立場である。さてこの孤独の重要さの意識は、集団主義的、順応主義的な現代日本人の生活態度とは全く対蹠的な価値観に基づく点でとくに意義深い。ミルは『自由論』のなかで個人が群衆の中に埋没されてしまっている状況を憂えている。そして、個性の重要さのために自由ならびに状況の多様性が必要なことを述べて、近代社会における教育、交通、経済、政治の手段を通じる同化の増大に対して非順応の重要さを強調する<sup>4)</sup>。これは、19世紀のイギリスにおいて強まっていく個人の社会への埋没と同化に対する、個人主義の反撃である。同時にまた、それは人生の美質を自由に探究し、その範を見せうる人びとの多く存在する状況が望ましいという、あのミルの理想と照応している。そこに、孤独が人間の自発的活動を通じて、人間の精神的向上に連なるものだという、ミルの強靱な主張が窺われる。そして、自然はこのような個性への感情教育の最もすぐれた教師と看做されているのである<sup>5)</sup>。

ここでわれわれにとって重要なことは、孤独を可能にする条件として人口成長の停止が考えられていることである。ある大きさの人口は、たといそのすべての人が食糧および衣服の十分な供給をうけているとしても、なお過度に稠密な人口でありうるであろうというミルの主張の意味はここにある。われわれはここでそれが言われてから90年も後に、哲学者ヤスパースが次のような問いを発していることに注目したい、「われわれの現存秩序においては、遂には《人間であること》を大衆の中で精神的に窒息させるほど、それぞれの単独者のための空間を著しく狭くする人間の増

加が可能でありはしないか、或いは……働き蜂的な種類の間だけが残るような、否定的な淘汰や種族変化が可能でありはしないか<sup>6)</sup>。」そして彼は、人間が、みずからの現存在のために自分で創り出す道具の手にかかって破滅することもありうるであろう、と考えている。またヤスパースは、19世紀を通じて「大衆は形成と進歩とに満足していたけれども、そのかたわら、自立的な精神の持ち主たちは悪い予感でいっぱいだった<sup>7)</sup>」という。上に見たミルの主張こそは、この種の自立的な精神と経済思想との結合の先駆的事例であったと看做さるべきであろう。

しかしミルによれば、個性に基づく自発的活動が必要であるのは人間ばかりではない。自然もまた自発的に活動する余地が残されていなければならない。彼はいう、

「人間のための食糧を栽培しうる土地は一段歩も捨てずに耕作されており、花の咲く未墾地や天然の牧場はすべてすき起され、人間が使用するために飼っているもの以外の鳥やけだものは人間と食物を争う敵として根絶され、生垣や余分の樹木はすべて引抜かれ、野生の灌木や野の花が農業改良の名において根絶される、……このような世界を想像することは決して大きな満足を与えるものではない<sup>8)</sup>。」

すなわち、地球がただ単により大きな人口——しかもそれは決してよりすぐれた人口でもなければ、或いはより幸福な人口でもない——を養うために、地球のもつ楽しさの大部分のものが失われ、自然が破壊されてゆくというのであれば、人類のそうした前進の方向に停止の信号が掲げられねばならぬ、とミルは言っているのである。ここには経済資源の涸渇の問題はない。論じられているのは、美的な、或いは感性教育上の資源の涸渇である。さきに人口の成長停止は、孤独というものの必要のために、或いは人間の精神的深みの涵養のために求められたのであったが、いまこ

こでは、それとの関連を保ちながら自然破壊の防止のために必要とせられているのである。

すべて上述したところでミルが着目している局面は、自然対人口ないしは自然対人間のそれである、と言ってよいであろう。そしてまさにこの観点よりして過度に稠密な人口が否定され、この否定は人間の改善を媒介として実現され、さらにそれが人間のいっそうの改善をもたらす、と見られたのである。このようにミルの静止状態論における自然対人間の問題は、そのままに人口が問題である必然論から人間そのものが問題となる当為論への移行であった。われわれはミル当為論における人間と経済の関係をより深く究明してゆかなければならぬ。

- 1) 本誌第13巻第2号, p. 23.
- 2) J. S. Mill, *Principles*, IV, VI, § 2. (邦訳 [4], p. 108.)
- 3) *Ibid.*
- 4) J. S. Mill, *On Liberty*, Chap. III.
- 5) ミルは『自伝』の中でも自然の与える感情の教育について述べ、それは「人生の害悪といわれるものがすべて除き尽された暁にも、尚幸福のたえざる源泉となるべきもの」であると称えている。J. S. Mill, *Autobiography*, Oxford University Press, 1924, p. 125. (邦訳, 岩波文庫版, p. 159.)
- 6) Karl Jaspers, *Die geistige Situation der Zeit*, 1931. [飯島宗享訳, 『現代の精神的状況』理想社版, p. 280.]
- 7) *Ibid.* [邦訳, p. 21.]
- 8) Mill, *Principles*, IV, VII, § 2. (邦訳 [4], pp. 108-109.)

(2)

ミルが自己の最も奥深くにある人生観を彼の経済学の中に投入したのが静止状態論である以上は、彼がそこでどうしてもとりあげねばならなかった問題は、人間生活における経

経済活動の地位、換言すれば人間にとって経済とは何かという一つの本質的な問題であった。静止状態がミルにおいて当為とせられた一つの根拠はこの局面に、すなわち、産業生活に対する、また富の追求に対する、人間の態度の問題に関係しているのである。われわれは次にこの局面の吟味に移ってゆかなければならない。

ミルは先ず、社会思想の問題として、自利の追求に基礎をおく産業生活が人間生活の正常状態である、と見る常識を否定する。もちろん彼も、経済理論においては、営利原理と極大満足の原則によって行動する経済人を前提にしていた。しかるにミルが、より一般的な社会思想の地平に移ったとき経済学の設ける人間の仮設をかく却けた、その意味はきわめて大きいと言わねばならない。ミルはこの立場を次のように述べる、

「≪自らの地位を改善しようと苦闘している状態こそ人間の正常の状態である。今日の社会生活の特徴となっているものは、互いにひとを踏みつけ、押し倒し、押し退け、追いせまることであるが、これこそ最も望ましい人類の運命であって、決して産業的進歩の諸段階中の一つがそなえている忌むべき特質ではない、≫ と考える人々が抱いているあの人生の理想には、正直に言って私は魅惑を感じないものである<sup>1)</sup>。」

このように、ミルは経済中心の人間生活の現状と、そこに現われている同時代人の人生の理想には、共感できないことを言明する。かかる同時代の精神に同じないということは、一見たんなる個人の主観的好悪の表白のごとくに見えるかも知れない。けれどもミル自身の考えはもっと深いのである。ミルは、「今日のごとき人間の改善のごく初期に属する段階をその終局の型と認めることのできない人たちは、通常政治家たちが歓迎するとき種類の経済的進歩に対して、すなわち、単なる生産と蓄積との増加に対して、比較的無

関心であろうが、これは許さるべきであろう<sup>2)</sup>」と言っている。すなわち彼は、経済社会における一般大衆の行動を支える思想と、それに同じない精神の持ち主たちの思想を区別しているのである。後者の立場から見れば、生産と蓄積はいわば技術的可能性の事柄にすぎず、技術的可能性の中では彼らは充足を感じることができないのである<sup>3)</sup>。そのみならず、ミルは人間の改善はやがて前者を後者の段階にまで引き上げると見ている。このように考えるミルが啓蒙主義の精神進歩史観の立場に連なるものであることは、さきに指摘したとおりである。

それでは、一步をすすめて、「今日のごとき人間の改善のごく初期に属する段階をその終局の型と認めることのできない人たち」——これがミルの考える社会の先進的エリートである——の観点からみて望ましい人間行動の原理と、望ましい経済社会の状態はいかなるものであろうか。この側面におけるミルの積極的思想は次のように表明されている、

「人性にとって最善の状態はどのようなものかと言えば、それは

(1) 誰も貧しい者はおらず

(2) そのため何びとももっと富裕になりたいと思わず、また

(3) 他の人たちの抜けがけしようとする努力によって押し返されることを恐れる理由もない状態、である<sup>4)</sup>。」(標記の番号は筆者付記)

当為の状態としてここでミルによって漠然と想定されているものは、すでに(2)と(3)からして一種の充実した静止の状態であることが示唆されているが、われわれはここで暫く立ち止まって、ミルの議論を精しく追ってみよう。まずミルは、最初に貧困の消滅が人性の理想的な状態にとって不可欠な条件であることを述べている。しかしいっそう重要であると思われのは、人びとが或る一定程度の平均的生活水準に到達したあとでは、それ以上の富

の追求は顕示的欲求のため以外のものではなく、したがって無意義である、と看做す立場に立っていることである。彼はいう、

「(1)すでに必要以上に富裕になっている人たちが、裕福さを表示するという以外には、殆ど或いは全く快樂を生むことがないところの諸々の物を消費する資力を倍加するというのが、或いは(2)多数の個人が毎年毎年年中産階級から富裕階級へ成り上がり、或いは(3)有業の富裕者から無職の富裕者に成り上がるということが、なにゆえに慶ぶべき事柄であるのか、私には理解できない<sup>5)</sup>。」(標記の番号は筆者付記)

私はここに、後年のヴェブレンや高田保馬による顕示消費(*conspicuous consumption*)に対する批判の萌芽が見出されると思う。また私は、この19世紀も半ばの早い時期に書かれたこの箇所「最大多数の最大幸福」が国民総生産の無限の増大に結びついていると考える、いわゆるGNP信仰に対する告別を見出すものである。しかもこの批判が、どこまでも功利主義者であることを自任するミル自身によってなされていることに注意したいと思う<sup>6)</sup>。そこに、大衆の生活水準と生活の質的改善の先触れとしての経済成長と技術進歩へのミルの幻滅がある、と言うべきであろう。もっとも、ミルは世界の後進国の場合には生産の増加が引き続き重要な課題となることを認めるに吝かではなかった。また彼は、*アダム・スミス*と同様に国防を重視し、国家的独立の安全を期するには、ある国が富において隣国に甚しいおくれをとらないことが肝要だという留保条件を付けている。しかし究極には「最も進歩した国々では経済的に必要とされるのはより良き分配」であって、生産の増大ではないというのである<sup>7)</sup>。平等を目指す分配問題の重要性が、こうして、ミルにおいては大きな地歩を占めてくる。しかしわれわれの知るごとく、この局面においては嚴重な人口制限がミルの議論の当然の大前提とさ

れていたことを想起する必要がある。これを要するに、少なくとも進歩した諸国においては国民総生産物の増大は、平等が欠如し、ために「国民の大衆がこれらのものの恩恵の一部に預かることを妨げられているかぎり、それ自身として重要性に乏しい」というのがミルの基本的立場をなしていたのである。

さてミルにおいては、さきに個人の立場からは節儉と人口増加に対する思慮ある態度が要請され、そしていま、社会の立場から個人の勤労の果実(その大小は問わない)に対する正当な請求権と矛盾しない範囲内の、平等化の制度が重要視されるに至ったのであるが<sup>8)</sup>、それら二つの力の作用をうけると、社会は次のような特質を示すようになると見られたのである。

「(1)労働者層の給与が高く、かつ生活の裕かなこと、

(2)ひとりの人の生涯のあいだに獲得蓄積されたもの以外には、莫大な財産というものがないこと。

(3)しかし一方、ひとり荒々しい労苦を免れているばかりでなく、また機械的な繁雑な事柄からも——しかも心身ともに充分な余裕をもって——免れて、そのために人生の美点美質を自由に探究し、また……その美点美質の手本を見せることができるような人びとの群れが、現在よりもはるかに大きくなっていること<sup>9)</sup>。」(標記番号と圏点は筆者)

これは、静止状態の一つの完成を示す素描としてきわめて注目に値するものであろう。(1)と(2)は現われてくる静止社会における個人の経済的状况を示しているが、最も重要なものは(3)である。ミルが既出の多くの箇所ですべての否定の論理は、ただここに描かれたごときすぐれた自由な人間の数多く存在するに至ることを待望し、その存在こそ「生活のアート」の改善とその社会的完成を示す、と彼

が見做したためであることがここで明かになる。富の追求が必要としているのは粗野な刺激であった。経済学が拠って立つ人間の自利の追求というものも、文明の進歩途上の一段階にすぎないものである。それは決して社会的完成に属するものではない。そして、社会経済のあらゆる施策制度は、究極には上に輪郭を示したごとき人間そのものの創造に向けられねばならない、——これが思想家ミルの抱く基本的ヴィジョンであった。さらに、われわれの論述のこの箇所ですべて重要なことは、ミルがこのような社会の特質と静止状態との関係について次のごとく考えていることである、「このような、今日の社会状態よりもはるかにすぐれた社会状態は、ただに静止状態と完全に両立しうるというばかりでなく、また他のいかなる状態とよりも、まさにこの静止状態と最も自然的に相伴うようである<sup>10)</sup>。」(圏点引用者)と。その理由は何か。われわれはこれを次のごとくに解する。ミルは人間の状態における上のような社会的完成を当為としたが、この目標はいつその生産の増大を目指す経済主義によっては到達せられず、人口の制限、分配の平等化、ならびに労働の軽易化によってはじめて可能になる、そしてそれらは静止状態を俟つと考えたのである。後者の路をとることは畢竟<sup>ひつぎょう</sup>静止状態につらなるものであり静止状態はまた上のごとき人間の改善に資すると考えられている。ここに静止状態がミルにおいて価値とせられたもう一つの重要な基盤が存在していたと見られるであろう。

しかしここで見落してならないのは、ミルは、上述の主張からともすれば連想されるかも知れぬロマンティカーでは断じてない、ということである。ミルが静止社会においてさえ、そこにおける社会成員の生活水準と福祉に決して無関心でない証拠は、静止状態論の全体に滲み出ている。なるほどミルは、喧騒の工業生活を嫌悪し、経済発展の点では遅れ

たフランス農民の生活のアートを賞揚している。が、だからといって、彼は決して小農と工匠の世界に帰れと叫ぶ浪漫主義者の一群には属しない<sup>11)</sup>。ミルはいう、「すでに工業なり農業なりにおいてひとたび大規模な生産の制度を採用した国民においては、それから後へ退くことはありそうにない。また、その人口が生活手段に対し適当な割合を保っているときには、後へ退くことは望ましいことでもない<sup>12)</sup>。」そのさい彼は大規模生産方式のもつ労働生産性の高さや労働苦痛の軽減、そして閑暇の増大という効果を考慮しているのである。しかしその場合でも、生産物の絶対量の大きさが問題なのではないことを、ミルは周到に付言している。またこのような大規模企業には前記の非人間化が伴うけれども、この道徳的欠陥を補うべく工業発展のゴールとして、産業に従事する労使の、そして最後には労働者同士の結合と共同組織が目指さるべきである、とミルは考えている<sup>13)</sup>。こういうミルは決して復古的ロマンティカーではなく、彼が目の当たりにしているイギリス産業発展の現状を容認したこと——或いは少なくともそれからの後退を考えなかったこと——が明らかなのである。

これを要するに、ミルは産業生活に伴う生活の粗野化を嫌悪し、生活のアートの改変を要求したけれども、産業発展の現段階そのものは容認したのである。しかしこの二つの態度の間には明らかに矛盾があるし、その間に或る種の妥協を介在させることなしには議論の一貫性を保持しがたいであろうと思われる。私はその妥協の一点を、ミルがさきに指摘した労働生産性の向上に伴う苦役の軽減と閑暇の増大のなかに見出すものである。すなわち、これらの要素がなければ人間は精神的向上と社会の再編のための余裕さえ見出すことができない、と考えられる。他面において、経済主義的な成長のみを追求しようとするれば、それのもたらす生活の質的低下はもとよりのこ

と、自然の吝嗇による静止状態の壁に突き当ることも必至であろう。かくて、そのような二律背反に直面したとき、その時点の産業発達の段階を認めた上で生活のアートの改編を求めるといふ、上に見たときミルの決断が生まれたと解釈することは不当ではないであろう。

- 1) *Principles*, IV, VI, § 2. (邦訳 [4], p. 105.)
- 2) *Ibid.* (同上, p. 106.)
- 3) 三宅剛一『道徳の哲学』(1969, 岩波書店) p. 188 参照。
- 4) *Principles*, IV, VI, § 2. (邦訳 [4], pp. 105-106.)
- 5) *Ibid.* (同上, p. 106.)
- 6) 彼は本文のような立場を採ったあとでもなお、彼自身をいぜん「功利主義者」であると考へていたことは、晩年の著書『功利主義論』(*Utilitarianism*, 1861, chap. II.)によって明らかである。すなわち、ベンサム主義からの彼の立場の変化と見られるものは、実は単に「功利」の中身を構成する諸要素の入れ替え——質的変換——が行なわれただけであつて、彼自身が功利主義者であることには変わりがないと考へていたのである。
- 7) *Principles*, IV, VI, § 2. (邦訳 [4], p. 107.)
- 8) ミルは平等化のための諸制度だけでは、社会の上層を低くすることはできても、社会の下層を永続的に高くすることはできないと考へていた(*Ibid.*)。そこに彼が人口制限に付与した第一義的な重要さを読みとることができるのである。平等化の制度としては、具体的に相続の制限と重課、土地私有の廃止ないし制限が主要内容として考へられていた。
- 9) *Principles*, IV, VI, § 2. (邦訳 [4], pp. 107.)
- 10) *Ibid.* (同上, p. 108.)
- 11) Cf. Holthoorn, *The Road to Utopia: a study of John Stuart Mill's Social Thought*, 1971, pp. 170-171.
- 12) *Principles*, IV, VII, § 4. (邦訳 [4], pp. 131-132.)
- 13) *Ibid.*

(3)

ミルが産業発達の現段階を承認した上で、彼の現前にある経済活動の水準を維持するとき静止状態を考へていたことは上に見た通りである。そのような前提のもとでの経済の循環をわれわれが想い画くとき、ミルの静止状態の経済的側面についてはなお批判的検討を要する若干の事柄があると思われる。とくに私が重要と考へるのは、静止社会における技術進歩の問題ならびに静止経済における円滑な循環進行の可能性に関する問題である。

まず前者について考へて見よう。われわれの既知るように、ミルの“The Art of Living” (生活の技法) は *Industrial Arts* (産業の諸技術) との対比において論じられていた。彼は、静止状態においては、人びとが立身栄達のために心を奪われることがなくなるので、生活の技法が改善される可能性ははるかに大きくなると考へたのであるが、他面、彼は産業の技術に関しても、やはり従来通り熱心に効果的に開発されるであろうと樂觀している。ただこの場合における唯一の差異といへば、産業技術の進歩が富の増加以外の何の目的をも果さない場合とは異なり、技術進歩の正当な効果、すなわち労苦を軽減し閑暇を増大するという、本来の効果を生むようになるのと彼が見たことである<sup>1)</sup>。産業上の技術進歩も、経済的効率の問題としてではなく、ここでは人間の改善に第一義的に関連をもつものとして捉えられているのである。

いったいミルによると、今日までは、従来行なわれたすべての機械の発明が、果たして人間の日々の労苦を軽減したかどうか、甚だ疑わしい。それは、たしかに「益々多数の工業家やその他の人たちが財産をつくるのを可能にした。それは中産階級の生活上の余裕を増大した。」こうして機械の発明は富の増大に貢献したことをミルは認める。しかし他面、ミルにとって重要なことは、それが労働を決

して快的にしなかったこと、むしろ逆に「従来よりもより大きな人口が、従来と同じ苦しい作業と幽囚の生活を送ることを可能ならしめた」点である。したがって、技術進歩を含めた産業上の改良は「人間の運命がその本性上、またその将来においてなしとげるべき諸諸の偉大な変革については、いまだそれを実現し始めてもいない」と見られたのである<sup>2)</sup>。

それでは、産業技術の改善が人間の改善と結びつくための条件は何であろうか。ミルはそのための二つの条件を挙げるが、これはさきに財産の平等化の条件として論じたものと同じである。平等化のための公正な施策制度がその一であり、他の一つは、人類の増加が賢明な、先見的思慮をもった指導のもとに行なわれることである。ミルによると、これらの手段による平等化の前提のもとで初めて、「科学的発見者の知力とエネルギーによって自然諸力から獲得した戦利品は、人類の共有財産となり、万人の分け前を改善・増加させる手段となることができるのである<sup>3)</sup>。」ここでミルが「分け前」というものは、単に生産性増大等の経済的利益にとどまらず、産業技術が人間じしんの改善に寄与するところの苦役の軽減や閑暇の増大を含んでいると考えられる。ミルが産業上の技術進歩の真の意義をここに認めていることは明らかであろう。産業の能率ではなく、人間の生き方が問題とされているのである。

ところで、ミルは静止状態下においても労働節約的な技術進歩の可能性を上のごとくに論じているが、直ちに起る疑問は、利潤率が極小となり、資本蓄積がゼロである状態において、このような技術進歩がどうして可能であろうか、ということである。同時に、このような技術進歩のもとで富が定常状態をつづけるのは何故であるか、という疑問もまた起ってくるであろう。これらの疑問の根底には静止状態の循環の機構の問題が横たわっているのであるが、この重要な問題についてミルは関

説するところがないのである。いな、われわれには静止状態の基盤をなす経済体制についてさえ十分に知らされていない。ミルの所論から見て、それは社会主義ではないが、純粋な資本主義でないこともたしかである。結局のところそれは、土地所有や財産の保有に関して厳重な規制の行なわれる一種の混合体制であると推察してよいであろう。そして、さきに見た所の、ミルのいわゆる人間の改善を示す社会の先導者の多数の出現を考えれば、経済主体の行動の動機も、決して資本主義下と同一である必然性は存しないであろう。ミルは、こういう特殊性をもった静止状態下の技術進歩について、その人間的意義は述べたけれども、その技術進歩の経済的メカニズムをついに問題とすることはなかった、或いはそうした経済問題の存在をきびしく意識することがなかったと言ふべきかも知れぬ。ミルにおいては、それは改善された人間の生活の規範に関わる事柄であって、いまだ分析の対象たる問題ではなかったのである。

次に第二の問題、人口増加の通減および停止が経済循環に及ぼす影響いかんという問題についても、ミルが何の憂慮も感じていなかったらしいことは、現代的視点から見るとやはり特異なことに思われる。こうしたわれわれの感情は、ケインズが『一般理論』公刊の翌年に行なった講演「通減人口の若干の帰結」をわれわれがすでに知っているという事情に基づいているかも知れない<sup>4)</sup>。経済思想史の上で通減人口の問題が最も深刻に思索されたのはこの論文であるから、われわれはここで、ミルにおけるこの問題の無視と対比させつつ、その空隙を補うためにケインズの所論を顧みることにしてしよう。

ケインズによると、人口増加は資本需要にきわめて重要な影響力をもっている。いったい資本需要は三つの要因に依存する。人口、生活水準、および資本技術がそれである。この三者は、消費者数、平均消費水準および平均生



産期間と言い替えてもよい。こうしてみると、人口が資本需要を規定するのは、根本的には人口が消費を決定するからだということが判明しよう。その結果として——技術変化と生活水準の変化を問題にしなければ——人口増加の時代は経済的楽観を促進する傾向をもつ、ということになる。これに対して、人口減少の時代にはその逆が当て嵌まる。したがって、およそ人口増加から人口逡減への転換が経済循環に及ぼす影響はきわめて災害の大きいものであると、ケインズは考えるのである。しかし、この見解に対しては、マルサス人口論の基本命題——ひとり当り資本・資源の増大は生活水準にとって有利であり、人口増加はこの増大を阻止することによって人類の生活水準にとって害悪である——と正反対のことを主張をしているのではないか、という疑問が直ちに起ってくるであろう。これに対してケインズは下のごとくに答える、

「たしかに静止人口は生活水準の向上を実際に容易にする。しかしそのことは一つの条件のもとでのみ可能である。静止人口に可能となる所の資源の増加か、或いは消費の増加——そのいずれであるにせよ——が実際に起こるといふ条件である。というのは、吾々はマルサスの悪魔と同じ激しさをもったいま一つの悪魔を少くとも吾々のすぐ近くにもつことを知っているからである、——有効需要の崩壊を通じて逃れ出てくる失業という悪魔がそれである。恐らく吾々はこの悪魔をもまた一つのマルサスの悪魔と呼びうるであろう。なぜならこの悪魔について吾々に最初に語ったのはマルサス自身であったからである。……マルサスの悪魔P〔人口〕が鎖につながれた今、マルサスの悪魔U〔失業〕が縛めの縄を切って脱れ出ようとしている。人口の悪魔Pが鎖につながれたときには吾々は一つの脅威からは自由になる。しかし吾々は以前にも増して資源の不完全利用という他の悪魔Uの脅

威にさらされる<sup>5)</sup>。」

さて、ここに見られるようなマルサス=ケインズの有効需要論を、ミルは無視していた。そのために、ミルの静止状態待望論ないし当為論では、人口増加率逡減ないし静止人口の急激な出現がもたらす経済的困難は、まったく取り上げられなかった。こうしてシュンペーターが適切に指摘したように、ミルにおいては一方で過剰人口の妖怪は人間の改善への信頼によって既に排除されていたし、他方、過少消費の妖怪についてはミルの経済学はこれを予期する装置を備えていない、ということになった<sup>6)</sup>。したがって、第二次大戦前後の停滞論者や現代のゼロ成長論者の議論に随伴する経済的不安を、ミルは自己の不安とすることがなかったのである。そして、このことがミルの静止状態論における一つの欠落をなしていることを、われわれは否定できないのである。

しかしそのことは、ミル静止状態の循環の困難性を予測するものではあるが、その不可能性を宣告するというものではない。むしろケインズの次のような、静止人口社会に与える処分箋は、ミルの上記の欠落の部分に対して心強い救援を送るものであることを、われわれは指摘したい。

「私が主張しようと思うのは、静止人口の場合には、繁栄と人民の平和の維持のためには、所得を一層平等化するような再分配によって消費の増加を図ると共に、生産期間の長さの実質的変更を有利にするような利子率引下げの政策に、吾々が絶対的に依存することになるということである。

「それにも拘らず必要な変革に抗しようとする社会的政治的諸力が存するであろう。……もし資本主義社会が所得の一層平等な再分配に抗議し、銀行および金融勢力が19世紀を通じて支配した平均的水準に近い利子率を維持することに成功するならば、資源の不完全利用への慢性的傾向は遂にはこ

の社会形態を覆えし破壊せざるをえない。しかし、他方、もし時代の精神と現に存するような啓蒙とによって説明され指導されて、蓄積への吾々の態度が、静止的または遞減的人口の状態に適合したものとなるよう、漸次發展せしめられるとすれば——私の信ずるところによればそのことは可能である——、おそらく吾々は二つの世界の最善のものを獲得することができるであろう。』

このようにして、ケインズは、静止的人口または遞減的人口は、もしわれわれが必要な力と知恵とを用いるならば、伝統的な生活様式のうちの良きものを維持しながら、生活水準をあるべき水準にまで高めることを可能にするであろうと看するのである。そしてわれわれにとってとくに意義深いと思われるのは、ケインズの重視している二つの条件がミルの所論と合致することである。すなわち、所得分配の平等化を必要不可欠の条件と見る点でミルと一致し、さらに利子水準の問題について、ミルにおいては静止状態下の利潤したがって利子は定義によって最低限に到達しているのであるから、ケインズの条件をみたしている。

これはいまだ精密な形式で展開された議論ではないけれども、もしミルの静止状態の循環が非現実的だという主張があるならば、それに十分抗しうる力をもつであろう。

- 1) *Principles*, IV, VI, § 2. [邦訳 [4], p. 109.]
- 2) *Ibid.* [同上, pp. 109-110.]
- 3) *Ibid.* [同上, p. 110.]
- 4) J. M. Keynes, "Some Economic Consequences of a Declining Population," *Eugenics Review*, Apr. 1937. (Reprinted in *Readings in Economic Analysis*, Vol. I, ed. by Clemence, 1952.)
- 5) 訳文は塩野谷九十九氏による。同氏著『経済發展と資本蓄積』1951, pp. 149-152.
- 6) Schumpeter, *History of Economic Analy-*

*sis*, 1954, p. 571. (邦訳, 第3巻, pp. 1200-1201.)

- 7) Keynes, *op. cit.*, 塩野谷九十九, 前掲書, pp. 151-152.
- 8) ケインズは 1928年から 1930年にかけて数回「吾々の孫たちのための経済的可能性」"Economic Possibilities for our Grandchildren" という講演をした。この中で彼は「経済問題は人類の永遠の問題ではない」ことを説いた。そして経済的欲求に絶対的ニーズと相対的ニーズを区別し、われわれが非経済的目的のために自己のエネルギーを献げることを選ぶとき、絶対的ニーズの飽和点に達していることを主張する。金もうけに熱心な世人はすべての人間を経済的競争のトラックに駆り立てようとするが、真に経済的豊饒が来たとき、その成果を楽しみうるのはこの種の金もうけに熱中した人々ではなく、「生活のアート」(the art of life) そのものを自己の内部で活かしつづけ、これを培って完成にまでもたらしうる人々である、とケインズはいう。この小論文で the art of life の用語を二度用いているが、その用語のみならずその精神において、彼がミルの静止状態論から影響を受けた痕跡が確実に認められると思う。cf. *The Collected Writings of J. M. Keynes*, Vol. IX, pp. 321-332.

### 3 生活のアートと否定の経済思想

#### (1)

以上においてわれわれは静止状態の経済的側面を論じてきたが、次に静止状態のなかでミル自身が強調した非経済的側面の吟味に移らねばならない。それは、資本と人口の静止状態は必ずしも人間の改善の停止を意味しない、という主張に要約されうる論点である。ミルによると、静止状態においてもあらゆる種類の精神的文化や道徳的進歩のための余地、そして「生活の技法」"the Art of Living" を改善する余地は従来と変わりなく存在する。

とくにここでは「生活の技法」が改善される可能性は遙かに大きくなる、と見られている。なぜなら、静止状態においては、他人を追い抜くための競争が不要となり、立身栄達の術のために人が心を奪われることがなくなるので、人は生活の技法の積極的改善に赴く、と考えられるからである。経済の静止が人間を慣習の軌道に留めおくことなく、たえず何らかの進歩に向って前進させると考える点で、ミルはまことに啓蒙主義の殿將に相応しいと言ってよいであろう。しかしわれわれは就中、「生活の技法」の改善が直接に人間の改善と結びつけられている点に、特別の関心を払いたいと思う。「生活の技法」の問題は、ミルの思想において重要な一礎石をなしていると考えてよいのである。

われわれがさきに見たように、ミルは経済社会の現状において、人びとの生活の技法を圧倒的に支配しているものは人間の物財獲得の競争である、と考えていた。彼はこれについて、

「それは文明の進歩の途上における必要な一段階ではあるだろう。……それは成長に伴う一つの偶発事である。退歩の兆候ではない。けだしそれは必ずしも高い向上心と英雄的な道義とを破壊するものではないからである<sup>2)</sup>。」

と述べている。このように彼は『経済学原理』のなかで経済行動面での人間の現状は、社会進歩の一道標としては存在価値が認められるし、人間の向上進歩という観点からともかく許容できるものだ、と考えたのである。さらに、彼はこの進歩の特定の段階に関して次のようにいう、

「人類のエネルギーが——かつては戦争における努力に使用されていたが——いまは富を獲得するための努力に使用されているということ、しかもそのような状態が、よりすぐれた精神をもつ人々が他の人たちを教育してよりよき状態へ移らせることに成

功するまでつづくということは、人類のエネルギーが鈍りよどむよりも、疑いもなくはるかに結構なことである。人間の精神が粗野であるかぎり、それは粗野な刺激を必要とする。

「いやしくも富が力であり、及ぶかぎり富裕になるということが万人の野心の対象となっているかぎり、富を獲得する途が、すべての人に対し、偏頗や依怙ひいきなしに開かれているということは、最も時宜を得たことである<sup>2)</sup>。」

このように、富が力である現状において、また人間の精神が粗野であるかぎりにおいて、獲得競争の渦中にある人間の現状は肯定される<sup>3)</sup>。そのうえ、じつに経済学の成立そのものが、かかる人間精神進歩の段階に対応したものであることを彼は示唆している。

このようにして経済学の設定する人間性に関する仮説——すなわち競争場裡の個人の金銭的利益の追求——は、たんに科学上の仮説にとどまらず、現状における人間の真実に他ならないことを彼は承認するのである。しかしミルは社会学者としてその現状を認めても、社会哲学的にそれに満足しているわけではなく、そうした状態が「決して社会的完成に属するものではない」と考えていた点はさきに述べたが、ここでもその状態の承認は、よりすぐれた精神をもつ人びとが他の人たちを教育してよりよき状態へ移らせるまでの、暫定的承認であることを示唆している。同じ態度で彼は、「将来の博愛主義者も、その実現に力を藉そうと熱心に希望することはないであろう<sup>4)</sup>」という。これは、生活の技法としてこの文明段階の人間がそこに墮ちている富の獲得の努力への評価と批判であり、こうした生活の技法を変革することこそ、まさに彼の中心課題であったのである。すなわち、獲得競争社会の生活の技法からそれとは異なる、他の生活の技法への変革が問題であり、したがって、そこには経済学の前提する種類の生

活の技法への批判が含まれているのである。こうしてミルの静止状態の当為論は、the Art of Life を問題とすることによって、人間における経済行為ないし経済生活の根源的目的を問うものとなったのである。ここにある問題意識は資本主義か社会主義かといった経済体制の次元を超えている。それは、科学とは対立したアートの議論を媒介として、経済哲学の境位に踏み入っているのである。

しかしそのことは、ミルにとって経済学を否定することを意味しない。その意味を少し立ち入って論ずれば次のようになるであろう。いったい、従来生活の技法を人間行動の中心に据えて捉えたものが経済学である。或いは、ミルのいわゆる特殊社会学としての経済学である。ミルによれば「経済学は……富の追求から生ずる社会生活の諸現象のみを問題とする<sup>5)</sup>。」それは富の欲望以外の殆どすべての情念や動機を全く抽象してしまうけれども、「このことは、経済学者が愚かにも事実人間はこんなふうに造られていると考えたのではなくして、科学が必然的にとらねばならぬ方法論なのである。……人間行為のうちでも富が主要なる目的とすらされていないものについていえば、これらには経済学はその結論を適用できるとは自負しない。だがまた、富の獲得が公然として主要な目的であるような活動部門もある。経済学が念頭におくのはこうした方面だけである<sup>6)</sup>。」とすれば、彼自身の静止状態論におけるように物財の獲得競争以外の生活の技法を求めることは、経済学の対象とするとき生活技法の外に出ることを意味する。かくしてミルの静止状態当為論が異なる生活の技法を問題とするかぎり、それは明らかに科学としての経済学の範囲を超えた分野を扱っているということになる。それは、既述のコントの「歴史的方法に立つ一般社会学」の領域には属しても、「特殊社会学としての経済学」の枠からはみ出るものとなったのである。しかしミルは最初からこのことを

予期していたと見るべきである。なぜなら、ミルの『経済学原理』の副題たる「社会哲学への経済学諸原理の若干の応用」という趣旨が生かされてくるのはまさにこの点だからである。

かくてミル静止状態論における生活の技法の変革に関する議論は、人間性と社会の科学からは区別されるものである。しかし、それはまさに後者に対応する部面の実践の方法に関する論議だと言わねばならない。したがって、当然のことながら、そこで当為とされた諸目的は科学から引き出されたものではない。精神諸科学全般に対するミルの考え方によれば、当為とされるこの種の目的そのものの規定は、ひとえに実践の論理の、換言すれば「アート」の、固有の領域を形成するものなのである。ここでわれわれは静止状態論において重要な位置を占める生活の技法の問題を明らかにするため、ミルのいう「アート」とは何かを解明しておく必要があると考える。

1) *Principles*, IV, VI, §2. (邦訳[4], p.105.)

2) *Ibid.* [同上.]

3) ミル『原理』の初版に見られた次の叙述は、資本主義下の経済生活における生活のアートの記述として特別の意義を持つものである、——「アメリカの北部および中部諸州は……この段階における文明の、しかもきわめて好都合な事情のもとにおける、一標本となっている。……そしてこれらの有利な事情がこれらの州のためになした一切のことは、ただ一方の性に属するすべての人たちの生涯がドル稼ぎにささげられ、他方の性に属する人たちのそれが、これらのドル稼ぎをする人たちの養育にささげられる、ということであるように見える。」(邦訳[4], p.110.)

4) *Principles*, IV, VI, § 2. (邦訳[4], p.105.)

5) *A System of Logic*, Bk. VI, Chap. IX, § 3.

6) *Ibid.*

(2)

ミルの『論理学体系』の第6篇最終章は、「実践の論理ないしアートについて」(Of the logic of practice, or art) の表題のもとに、サイエンスから截然と区別されたアートの一般論について論じている。そのなかでミルは一つの範例として、「人間性および社会」に関するサイエンスが存在するのは当然であるが、そのごとくに、サイエンスのこの部分に対応したアートの存在することも確実であると指摘する。そして、「倫理学或いは道徳」こそ、まさに人間性および社会に関するアートである、と考えている<sup>1)</sup>。だから倫理学の方法が、とりまなおさず、アート或いは実践の論理に他ならないとされるのである。これはミルがたんなる一例として述べたものであるが、そこから出てくる重要なことは、「あらゆるアートの目的ないし意図と、その手段とを結び合わせる推理は、サイエンスの領域に属する」けれども、「目的そのものの規定はひとえにアートに属する事柄」だという点であろう<sup>2)</sup>。

ところでミルによれば、あらゆるアートはそれ自身の第一原理、すなわち一般的な前提をもっている、という。具体的には、それは求める対象を説明し、この対象を望ましいと認めることである。およそアートの目的は実践にあるけれども、その実践のためには、正しい称賛に値する対象が何であるかを、またそれらの対象の優劣を示す真の順序は何であるかを決定する、一般的前提が必要とされるのである。そこで彼はいう、

「これらの一般的前提は、それから演繹される主要な結論と共に、まさしく生活のアート (the Art of Life) たる一体の学説 (a body of doctrine) を形成する。(或いは、むしろ形成しようというべきである。) その内容をなす三つの部門は徳性 (Morality)、慎慮ないし政策 (Prudence or Policy)、

および美学 (Aesthetics) である。換言すれば、人間の行為ならびに事業における正義 (the Right)、便宜 (the Expedient)、および美ないし高貴さ (the Beautiful or Noble) である<sup>3)</sup>。」

このようにミルのいわゆる生活のアートは、多元的諸価値にかかわりをもつ。具体的には、正義と便宜と美という三つの価値に関連を有する。ミルによると、あらゆるアートは、科学の見出した自然の諸法則と、今まで目的論 (“Teleology” or “the Doctrine of Ends”) と呼ばれてきたものの一般原理との結合の成果であるが、上記の生活のアートは——もっともその主要部分が未だ創造されていないことを彼は認めている——あらゆるアート中の最高のものであって、他のアートはすべてこれに従属し、これによってテストされると考えられているのである。

ミルは上の議論において、知識の第一原理が存在するように、行為の第一原理も存在することを説く。そして後者は、願望の対象たる目的の善悪を、絶対的に、また相対的に決定するところの究極的規準を示すものだという。たとえば、ある道徳学説がたとい真理であっても、それは人間の行為のうちの本来道徳的といわれる領域をみだすにすぎないであろう。生活上の実践のためには、もっと一般的な、生活のアートの規準が求められねばならないのである。そして、もしこの原理が正しく採られるならば、それは恰も、慎慮、政策または趣味の究極的原理に対すると同様に、道徳の究極的原理に対しても役立つことになろう、とミルは考えるのである<sup>4)</sup>。

それでは、そのような行為の第一原理たる生活のアートの規準は何か、が次の問題となる。われわれはすでに静止状態における生活のアートの改善の具体的内容についてのミルの所論を前節で吟味しているから、『論理学体系』において展開された生活のアートの原理論を、静止状態論における具体論と対比

してここで吟味するのがよいと思う。

ミルは、その生活のアートの原理を、『論理学体系』第6篇で次のように論じている、

「あらゆる実践の規準の従うべき一般の原理、そしてこれらの規準を試すべき試金石は、人類の、いなむしろ一切の有情の存在の、幸福を増進する原理である。言いかえれば、幸福の増大が目的論の究極の原理である<sup>5)</sup>。」

彼は端的にかく述べるにとどめて、その原理の証明を、晩年の『功利主義論』(1863)に譲った。しかし注意すべき点は、このように『論理学体系』の中ですでに、幸福増大の原理がすべての目的の正しさをテストするものであり、すべての目的の統御者でなければならぬと主張しつつも、同時に他方、それ自身が唯一の目的ではないことを認めていることである<sup>6)</sup> この後半の主張に対する理由としてミルは、或る程度まで幸福を無視するような感情が養われるならば、概して一層多くの幸福が世の中に存在することになるのを証明できるからだ、と考える。宗教でいう慈悲とか無欲とかはそうした感情として考えられるであろう。かくして幸福増大の原理に代って、個々人の最高の目的として、ミルにおいては「意思と行為とを理想的な高貴さにまで高める」という新しい目標が現われる。しかし彼は、この種の性格の高昇を可能ならしめるものは何かという問題すら、結局は究極原理としての幸福の観念に照らして決せらるべきだとして、次のように主張する、

「性格そのものが個人にとって最高の目的であるべきだというのは、ただ単にこうした理想の高さにおける或いはそれに近い性格が少しでも多く存在するならば、他のあらゆるものよりも、次の二様の意味において遙かに人生を幸福ならしめるであろうという理由からである。すなわち、比較的卑近な意味においては快樂と苦痛の欠如を増大し、より高い意味においては生活を今日

殆ど一般的にあるようなとるに足らない幼稚な姿にとどめずして、高くすぐれた能力ある人々が憧れるような状態にまでもたらずからである<sup>7)</sup>。」(圈点筆者)

かくて生活のアートの究極の原理は、実質的には、ミル自身の意味ではやはり幸福増大を基調とする功利主義の原則に立つものであったが、形式的には、幸福原理に対する否定の要素を含むところの、人びとの意思と行為とを理想的高貴さにまで高めることであった、と理解されねばならない。とくにわれわれは、ミルが今日の大衆の一般生活を「とるに足りない幼稚な姿」と呼び、理想の生活を「高くすぐれた能力ある人々が憧れるような状態」と言っている点に、特別の注意を払いたいと思う。なぜなら、ここに、歴史の進行においてよりすぐれた精神をもつ人びとが人間の改善を先取りし、他の人たちを教育してよりよき状態へ移らせるといふ、ミルの思想がそのままに現われており、それが、「静止状態論」における生活のアートの議論と、『論理学体系』におけるそれとを結ぶ懸け橋となっている、と考えられるからである。

これを要するに、上の『論理学体系』の中で述べられている生活のアートの原理は、まさしく、ミルが「静止状態論」の中で述べたその具体的な姿と完全に符合しているのである。これによって、われわれは、ミルが経済の静止状態においてこそ人間の向上改善の可能性があるという議論を展開したことが、単なる偶然的着想に基づくものではなく、『論理学体系』から『功利主義論』にいたるミル思想の根幹に直接繋がっていることを知りうると思うのである。

1) *A System of Logic*, Bk, VI, Chap. XII, §1.

2) *Ibid.*, VI, XII, § 6.

3) *Ibid.* この引用の部分は二つの点で興味をひく。一つは美および美学の重視にみられる、精神的危機よりの回生後のミル思想へのコル

リッジの影響であり、他はアダム・スミスにおける道徳哲学講義の体系との比較の観点である。後者とミルの生活のアートの比較という点では、正義ならびに便宜の重視において両者は共通している。しかし体系上スミスは他に理論的ならびに倫理的部門を、ミルは他に美的部門を立てる点で差異がある。(cf. Dugald Stewart, *Biographical Memoir of Adam Smith*, 1793.) なお、日常生活の規制において正義と便宜の二部面を区別し、これら双方の重要性を認める観念は古く、とくにキケロにおいてすでに顕著である。(cf. Cicero, *De Officiis*.)

- 4) *A System of Logic*, VI, XII, § 7.
- 5) *Ibid.*
- 6) *Ibid.*
- 7) *Ibid.*

### (3)

さて経済の静止状態において、人間の精神的向上のための余地が生まれ、生活のアートを改善する可能性が生ずるといふ、ミルの主張は上に述べたとおりである。ところで、このように向上し、進歩した人間にとって経済生活の意義はどう変わるであろうか。その種の人間の経済観と、そこから出てくる経済行動はどんな性格を帯びたものになるであろうか。これらが、従前の獲得競争社会における人間の経済観或いは経済行動と同一であるべき必然性は殆ど存しないであろう。われわれはここで、静止状態下の、この進歩向上した人間のもつ経済観を問いたいと思う。

われわれはその問題を、いまアダム・スミスにおける人間と経済の問題を顧みながら、それとの対照において考えてみたい。とくにスミスをとりあげるのは、彼においては人間の経済活動が、単に経済的側面からのみではなく、全人的観点から見られていて、人間と経済の関係を考える場合の好個の範例を呈示していると思われるからである。

いったいアダム・スミスは、人間の自益(*self-interest*)に基づく行動を肯定し、これを

彼の経済思想の中心に据えたが、他人の迷惑を顧みぬ利己心(*selfishness*)に基づく行動はこれを排撃した。すなわち、スミスによれば、「富、名誉ならびに昇進を目指して行われる競争において、彼はすべての競争相手を追い抜くために、できるだけ一生懸命に走り、あらゆる神経とあらゆる筋肉を緊張させるであろう。だが、もし彼が相手のだれかを踏みつけて走ったり、或いは引き倒したりすれば、傍観者は大目にみる態度を完全にやめてしまう。それは傍観者が認めることのできない、フェア・プレイの違反なのである。傍観者は、妨害者がこの被害者を無視して自分のことだけしか考えないあの自愛心に移入せず、妨害者が被害者を傷つけたその動機に共鳴するわけにはいかないのである<sup>1)</sup>。」この文言に明かなように、スミスにおいては利己主義に陥るほどの自愛の無限追求は許されえないものであった。それどころか、そのような自愛は幸福にみちびく真の自愛とは認められえぬものであった。ここにスミスにおける「自愛の是認」と「利己主義の否定」がある<sup>2)</sup>。

しかるにミルにおいては、スミスの意義における自愛と利己主義の区別はない。ミル自身のなかに見られるのは、経済学的方法論的自覚としてのいわゆる経済人の観念の成立である<sup>3)</sup>。そこには、自利追求の合理性の貫徹が存在するのみであるから、自愛と利己主義との間に一線を画することは考えられない。したがってスミスの定義における利己主義の否定はそこにありえない。しかし、だからと言って、そうした獲得主義が『経済学原理』のミルにとって魅力のないものであり、望ましいものと映っていなかったこともわれわれがさきに見たとおりである。人間の利己に発するこのような経済活動は、ミルにおいて倫理の問題ではなく、いちおう好悪の問題であった。したがって、それを選ぶ主体の選択の問題であるとされた。そして、人間の経済行動一般が功利の原理に則っていることをミル

は否定しないのであるから、倫理的には、利己的経済活動といえどもミルにおいて是認されるものであったと考えられる。ところで、静止状態論において、社会的エリートの先導による人間の改善という視点が入ってくると、ミルにおいてもそれは好悪の問題から当為の問題へと変わっていく。こうしてその問題は結局、ある当事者の考える功利のレベルの問題、換言すれば幸福の質の問題に帰着することになる<sup>4)</sup>。

さて、功利の質的問題に関連してわれわれが「静止状態論」において注目したことは、ミルの生活のアートの究極の原理としての功利主義が、いちど否定によって媒介されたところの高次の功利主義だということである。すなわち、ミルは、或る程度まで幸福を無視するような感情が養われるならば、概して一層多くの幸福が世に存在するであろう、と説いたのであった。こうして静止状態におけるミルの功利主義は、直接的な功利の否定としての愛や利他を衷に包むことによって、より高次の段階へと止揚されたのである。そして、「生活を、今日殆ど一般的にあるような、とるに足りない幼稚な姿にとどめずして、高くすぐれた能力ある人びとが憧れるような状態にまでもたらず」こと、換言すれば、「意思と行為とを理想的な高貴さにまで高めること」が、個々人の最高の目的として掲げられるに至ったのである。当面の問題である経済生活の側面について言えば、それはとりもなおさずホモ・エコノミクスの人間の否定である、と言わねばならない。

しかしここで注意を要するのは、ミルの静止状態におけるより進歩した人間によって、ホモ・エコノミクスの無限追求はこのようにして否定されるけれども、それは一般的経済行動の否定を意味せず、したがってこのミルの思想は経済行為一般の意義を認めぬ否定の経済思想ではない、という点である。この点は、ミルがさきに「たれも貧しい者は

いないこと」を人性の理想的な状態にとって不可欠としたことに徴しても明かであろう。そこに、功利の内容における一定の物質的成分が幸福の基礎として認識されているのである。かくてミルにとっては、人びとが或る一定の平均の物質的生活水準に到達することは絶対に必要であるが、それ以上の富の追求は顕示的欲求のためでしかなく、したがって真の幸福には貢献しないとされているのである。そこに社会における富の蓄積の必要性和、同時にその限界性の認識がある。これをさきのアダム・スミスの場合とくらべて見よう。スミスにおいては経済社会発達の基本は個々人の自愛心であって、それが他を侵す利己主義となることは厳に戒められたけれども、自愛に基づく個々人の努力にはいかなる上限もおかれていなかった。これはミルの上記の主張と鮮やかな対照をなすものである。しかしミルはさきに述べたように、貧困の消滅を理想とするのであるから、彼が経済活動一般への否定論者でないことはたしかである。しかし彼は社会がいったん静止状態に到達したあとでは、そして社会のすべての個々人が或る程度の生活水準に到達したあとでは、それ以上の富の蓄積になんの意義も認めない。したがって、それは全称否定の経済思想ではないにしても、それが部分否定の経済思想であることは確実なのである。

さらに、われわれにとって注目すべきことは、ミルのこの思想が次の点で、安易な近代思想への否定を含んでいる点である。私がここで安易な近代思想と呼ぶのは、人口を増やすことと物質的生活水準を高めることを無条件に善とする思想である。今日それらは殆ど疑われることのない命題となっているが、ミルの静止状態の当為論はこの二つの命題に対して否定の立場をとるものであることに注意したい。いったいミル以前においても、古典派経済学において人口と高生活水準とは二者択一の問題であった。ミルがマルサスの忠実



な弟子として人口増加の停止を主張していた点についてはさきに詳述したが<sup>5)</sup>、ミルは今しがた述べたように、或る一定限度以上に物質的生活水準を高めることにも懐疑的であり、ついにこれを否定した点で、古典派経済思想と袂を分かつたものであった。ミルはこの生活水準の問題を最初、静止状態の必然性の認識から受動的にうけとめたのであるが、やがて積極的にこれを当為として唱えるに至った。私は、こういう方向への積極的転換をミルに促したものは、彼における生活のアートのもつ意義であったと考えるものである。すなわち、ミルにとって真に重要な問題は生活のアートの変革であり、その変革を通しての生活の質の改善であった。彼にとっては、必要限度以上に物質的生活水準を高めていく場合の、その経済行為の動機と目的が問題であった。それは、彼によれば、顕示的欲求を目的とし、利己主義を動機とする活動にすぎない。その種の活動は、人間の生活のアートとしては低次のものであって、決して誇りうるものとは看做されない。こういう評価のなかには、経済活動をピュリタンの世俗的禁欲的行動性と結びつける宗教倫理的思考の入り込む余地はまったくない。むしろ、より以上に物質生活を高めることが、その目的と動機を通して、またその落ち着きのない、喧騒な産業生活を通して生活の質を低下させるといふ、ミル独自の認識が横わっているのである。ミルが部分否定の経済思想の持ち主であることの根拠を、私はここに見出すことができると思う。そして、ミルにとっては、人口問題さえ解決するならば、上のような思想に基づく生活のアートの改善のためにはなんらの障碍も認められなかったのである。

さて、以上のごときミルの経済観がミルの全思想の中に占める地位について、なお若干の補足をしておく必要があるかも知れない。第一は彼の功利主義思想との関係に関するものである。ミルの上記の議論が主として関わ

っているのは個人であって、社会ではない。しかもなお、彼自身はいぜん功利主義者であることを放擲してはいない。言いかえれば、最高の道徳的目標が最大多数の最大幸福である、という立場にいぜん立っている。したがって彼の場合にも、ベンサムにおけると同様に、個人的目的と社会的目的の調和ということがやはり重大な問題として残っている。しかしこの問題の解決は、終局的にはミルが功利主義の「利己」的基礎から脱却し、個人が第一義的に彼自身の社会的完成を目指すこと——さきに見たごとく、この完成の概念には当然に利他的要素が含まれてくる——によって社会的功利を増進させる、という立場でなされているのである<sup>6)</sup>。部分否定の経済思想を保持したミルがいぜんとして功利主義者でありえた理由をわれわれはここに見出すことができると考える。

第二に、ミルが経済の静止状態のなかに却って文明の進歩状態を見ていることはとくに銘記すべきことと思われる。彼の青年時代の諸演説から知られるように、ミルは若くしてフランス啓蒙主義の進歩史観の全幅的支持者であった。そして、人間が知的にはもとより、道徳的にも進歩をとげることを確信し、進歩を妨げる障碍は結局克服されうると考えていた。彼にあっては人間の「完成可能性」は進歩の同義語に他ならなかった<sup>7)</sup>。個人についてこのような考えをもつ彼は、歴史的社會についてはギゾーの歴史論に学びながら、「社会における諸力の共存」がヨーロッパ近世文明の特色であるとし、そのことの原因をギゾーと共に改善の精神 (the spirit of improvement) の存在に帰したのである。立ち入っていえば、歴史の進歩を可能にするものは社会の諸力を対抗させつつ統合作用を行なわしめる改善の精神であるが、それらの社会諸力のうちの何か一つ、たとえば富の力 (the power of wealth) が完全な優位を占めて他が顧みられなくなると、人間の性質は支那に

おけるごとき停滞の相を示してくるという<sup>8)</sup>。このような歴史観に立つミルであってみれば、彼が社会諸力のうち経済の優位が圧倒的になれば社会は不健全になり、それは文明の進歩状態といえない、と考えたとしても決して不思議ではないであろう。そしてまた静止状態論で展開した生活のオートの変革、そこにおける部分否定的な経済思想は、決して文明の進歩にとってマイナスではなく、却ってそれこそが文明の進歩をもたらすと考えられていたことが十分に推察できるであろう。

われわれは上に静止状態論におけるミルの経済観それ自体をとりあげて部分否定の経済思想と呼んだが、静止状態論全体を通じても前節に見たごとく、自己目的としての経済的奮闘への弾劾と非市場的諸価値の擁護によって貫かれていたのであるから、彼がここで展開しているものが全体として少くとも否定的な経済思想であることは否めないであろう。そのかぎりミルの基本思想は、成長を讃え停滞を嫌悪する古典派正統の経済思想に対して、体系的に最初の叛旗をひるがえしたものと言うことができるであろう<sup>9)</sup>。

- 1) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, Part II, Section II, chap. ii. (訳文は米林富男氏による。)
- 2) くわしくは拙稿「スミス体系の新考察, 第1部」学習院大学『経済論集』第7巻第2号, 1971, pp. 15-20.
- 3) Cf. J. S. Mill, *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*, London, 1844. Essay V.
- 4) Mill, *Utilitarianism*, chap. II.
- 5) 本稿 (1) 第3章第1節。
- 6) Cf. Mill, *Utilitarianism*, chap. II. (前掲邦訳, p. 472.)。ミルは、社会的功利について『『経済学原理』の中で次のように述べている、「大体、人類の公共心というものは、現代の人びとが可能であると考えるよりも、はるかにより大きくなりうるものである。歴史が立証

しているように、人間の大きな団体でも、訓練の如何によっては公益を自分自身の利益と感ずるようになりうるものである。』(Principles, II, I, § 3. 邦訳 [2], p. 25) また彼は、功利主義のこの利己的基礎からの脱却も本源的には社会的エリートの知的活動の影響力に発すると見ている。すなわち、徐々たる輿論の形成を通して、人間のなかに本来的に存在する弱い同感の力を陶冶することによって、それは始めて可能になると言う (A System of Logic, VI, X, § 7.)。

- 7) 本稿, 第3章, 1, (1), 註3) 参照。
- 8) Mill, "Guizot's Essays and Lectures on History," *Dissertations and Discussions*, Vol. II. 1859, pp. 218-282, esp. pp. 236-238. そのすぐれた紹介が出口勇蔵『経済学と歴史意識』勁草書房, 1952, pp. 307-311にある。
- 9) ミルにおいてかかる否定的な経済思想に立つ生活意識は本来人間の改善を意味するものであり、この改善は大衆に先んじて社会的選良によって先取りされるものと考えられていた。まさにそのことを証するかのように、体系的には肯定的な経済思想に立つアダム・スミスが、人生の真の幸福には人間の経済的境遇は殆ど与らぬ旨を言い (拙稿「スミス体系の新考察 第1部」, 学習院大学『経済論集』第7巻第2号, p. 25. 参照), 同じく父ジェームス・ミルが、或る最小限の便宜品を超えれば物質的享樂は「大部分は嗜好」にすぎぬ (James Mill, *Elements of Political Economy*, 3rd ed. Ch. II, Sec. II.) と言明していたことは興味深い。彼らはミルの意味における社会的選良だったとも看做されよう。しかしミルに先んじたこれらの人びとの思想が経済成長の停止を当為としたものでないことは十分注意せられねばならぬ。cf. D. Winch, *Introduction to the Penguin Books Edition of Mill's Principles*, p. 42.

## 第4章 結 言

われわれは以上の吟味によって、ミルの静

止状態論がリカードゥ経済学に基づく静止状態必然論と、ミルの全社会思想の結実としての人間の進歩改善論との結合によって成立しているものであり、究極においては、後者すなわち社会の道徳的進歩がいかにも実現されるかを説明するために前者が利用されていることを知りえたのである。換言すれば、時間的必然としての静止状態の到来は、人間の進歩改善を実現すべき場所として構想されたのである。したがって静止状態論におけるミル独自の問題は、リカードゥと共通するところの経済学的必然論の中にはなく、リカードゥにあっては決して見出されることのなかった問題、静止状態の当為論の中にこそ認められなければならないであろう。そしてわれわれは、このミルの議論の背景に、人間における経済行動、或いは人生における経済的なものの意義に関して、ミルの与えている低い評価が存在することを何といても否定できなかったのである。

いったい彼の当為論の展開を可能ならしめた前提としての経済学的必然論に対してさえ、ミルのこの態度——経済的な一切の営為への低評価——は関係をもっていたと言わなければならない。なぜなら、シュンペーターはミルに就いて、19世紀の後半以降において「生の産資本主義的エンジンが達成しようとしていたものが、なんであるかに就いては、なんの考えも持たなかった<sup>1)</sup>」と批評したが、この生産力上昇の可能性へのミルの過少評価の一つの根拠として、彼が産業生活の意義に積極的関心を抱かなかつたことを指摘しようと思うからである。彼にあっては人間の経済行動に関するプロテスタント倫理的思考——ピューリタンの世俗的禁欲的行動性から、一貫した行為動機の維持ならびに職分倫理が出てくる、と看るところの——の存在の余地はなく、ただ功利の原理よりして経済行為は承認されるにしても、そこにはっきりと経済的なものの低さを認める思想が存在しているのであ

る<sup>2)</sup>。いわばミルの思考における経済社会には、アダム・スミスの場合において見られた自愛の人と慎慮の人の一致や、マーシャルにおいて囑望せられた経済騎士道のごとき倫理的世界は存在しえない。そこにあるのは自利をみたそうとする自己中心的な現実主義の欲求と願望であり、しかも、それは人間の欲求と願望のうちの低い段階を表わすものでしかない、と見られたのである。

経済の世界をこのように評価するミルにとって、静止状態の必然性に関する経済学の証明は、他のすべての古典経済学者の場合とは反対に一種の福音のごとくに響いたであろう。そこにおいてこそ、始めて人びとは富を求める経済的関心から解放せられ、ミルの持論たる人間精神の進歩、人間の改善が行なわれる場がひらける、と彼には思われたであろう。事実その原因が何であれ、彼の経済学がリカードゥにつづいて成長限界を認識したことは一つのメリットである。19世紀末にマーシャルは人口と資源の関係という点で、ミルの時代より改善をみた「光明に満ちた中間期」に生きていると感じたのであるが、その彼でさえ「今から一世紀の後には、(ミル)のその章節の本体は今日におけるよりも一層近代的になるかも知れない<sup>3)</sup>」と述べていた。そしてその言葉のとおり、ミルの議論と結びつけつつローマ・クラブが提出した「成長の限界」の問題を契機として、人類が転回点に達したとの意識は時代を覆い始めている。そして、この転回点における人口や雇用の問題を真剣に考えることは、ひとをしておのずから「人生における経済の位置」を問わしめずにはおかない。したがってまた、ミルが19世紀半ばに経済の静止状態における人間精神の変革と改善を考えたことが、来るべき時代の知られざる問題への先駆的な予見であったということも争いえない事実となっているのである。

このようにして、二度の大戦の時期をその中に含むとはいえ1960年代までの「光明に満

ちた中間期」のあとで、現在われわれは経済的にも精神的にも、まさにミル静止状態論の問題に直面しているのである。ひとは或いは、ミルがその「光明に満ちた中間期」の生産力の展開を予測できなかったとあって、また彼が静止状態を予告した時期は早すぎたといって彼を非難することは可能であろう。が、今日からみて生産力の十分な展開もなかったその早い時期に、この経済時代に生きる人間の精神の内実の欠如を、百数十年後の今日においてもきわめて斬新に聞えるような仕方でも透析し、新しい道を開示したミルの予言者的眼識は逆に讃嘆に値するであろう。しかし、ミルの議論と現代の問題とのあいだには一つの大きな落差が存在している。それは、ミルをして静止状態を当為と看做さしめた、あの単純な精神進歩史観は今日では殆ど用を済さぬものとなってしまったという事実である<sup>4)</sup>。しかし、そのことは断じて、ミルの問題提起とその将来観のなかには現代が直面している問題への連続性が、しかも直接的な繋がりがあるということを否定するものではないのである。

この連続性は、何かの積極的主張というよりはむしろ否定の側面に、すなわち否定の経済思想としての側面により多く現われている。これは経済成長の停止の必然性の認識から生まれ、低成長ないし停止の是認、いなそれらへの願望の上に基礎をおくものである。その願望の理由はミルと現代の主張者のあいだでは差異があるだろう。なぜなら、ミルの場合にはその状態こそ人間の改善の場であったが、こんにち根源悪を負う人間にとっての自力による自己改善という思想はすでに限界が痛切に感じられており、殆ど過去の墓場に葬られてしまったからである。しかし、それが提起されている背景と、目指す目標の大枠においては、現代の主張者たちとのあいだに共通性がある。現代ではそれはおおむね生命環境の破壊と資源涸渇からの人間の物理的な生き残りの道の模索の結果に由来しており、そこに

おいて人間生活における経済の正当な位置の回復が求められているのである。たとえば、かかる主張者のひとりであるシューマッハーは、経済成長が精神的・宗教的価値よりも重要だと信ずる人びとに対して仏教経済学の研究をすすめるが、その理由として、仏教経済学の中心課題は「近代的成長」か「伝統的停滞」かの選択ではなくして、物質主義者の不注意と伝統主義者の無感動との中間にある開発の正しい道、要するに仏陀の「聖八正道」の必須条件の一つである「正生命」を発見する問題であるからだとしている<sup>5)</sup>。

それにしても獲得競争社会の人間の経済行動に対するミルの評価は峻厳である。そしてそのことが却ってミルの経済思想において、およそ経済担当者の担うべき意義を曖昧たらしめてはいないだろうか。もし社会における経済担当者——根源的には生命維持資財の提供者たち——が、労使いづれたるとを問わずかかる社会的機能の遂行において正当な意義を認められないならば、その社会は不健全たることを免れぬであろう<sup>6)</sup>。したがってミルの経済思想もまた、否定の思想だけでは存立できないであろう。マーシャルが経済領域の大小の指導者に、金銭的動機によらざる経済騎士道に基づく諸行為を期待し、かかる行為の意義を評価したのは或る程度適切であった。それはミルの否定の経済思想に対する健全な反動であったと言うべきであろう。しかしミル自身においても、かかる方向への修正のきざしを——その客観的有効性はともかくとして——全然もたなかったわけではない。ミルの人間の改善の思想において彼が究極に依拠したのは、個人の功利主義倫理の質的变化であったが、それは大雑把に捉えれば、功利の内容が利己主義的なものから社会的連帯や利他主義へと拡がり変わることであった。その変化は大衆の経済行為の外面にもおのずから現われてくる筈であろう。しかしそれが個人の内面の領域から外部の行為へと発現するとき、

それが発動し易いような社会組織のチャネルの新設ないし組織そのものの変革が要求されるのは当然であった。こうしてミルの『経済学原理』においても「静止状態論」にすぐ続く章で、生産における労働者同士の、また労働者と資本家の協同組織が論議されてくる<sup>7)</sup>。こうした議論の水準においては、経済そのもののなかにミルが堯望した人間徳性の向上が生かされてくるべきなのであるから、ひとが経済の世界に行動することの意義は十分に認められている筈であろう。さらに、ミルの場合それが功利内容の利他的方向への質的变化に基づく以上、これを今日の世界と結びつけて考えた場合には、恐らく現代の後進国援助問題や贈与の経済学への関心と密接なかわりを持たずにはいないであろう。ミル思想が単なる否定の経済思想にとどまらないで、われわれの解釈するようにそこで経済の正当な地位の回復が意図せられている以上は、彼の思想の現代への連続性を想定することは不合理ではないであろう。

まことに社会における、また個人の人生における、経済生活の正しい位置の問題は、経済学者、哲学者を含めてすべての深く思索する人間の関心事であるだろう。それはすべての人が生活者としてなんらかの経済生活を生きているからである。われわれの古くして最も深く人生を考えた祖先たち、古代インドの婆羅門、古代ギリシャの哲学者、そして古代ユダヤの宗教者はみな一様に彼ら自身の冥想的、思索的、宣教的生活圏の外部に、そこから彼らが或いは托鉢して、或いは布施、喜捨ないしはなんらかの扶持として生活物資を仰ぐ経済圏を設定し、それに依存していた。彼らはみな一様に食欲を罪とし、物質生活の高きを自らも求めず、外部の経済圏にある大衆に対しても求めることを勧めなかった。とくに東洋では欲望からの脱却すなわち解脱が目標であること——これは近代経済人の目標と

正反対のものである——がひろく承認されていた。人間の欲望の充足を公準とする18世紀以降の経済学的観点からみれば、彼らの把持したものはひとしく否定の経済思想であったという他はないであろう。思想の歴史は人類の英知が開けたあの枢軸期に一齐に開花したが、今から顧みると、経済思想の歴史が「否定」によって始まったことは著しい事実であったと言わねばならないであろう。

西洋の経済思想のその後の展開についてみれば、ゆるやかに時の流れた中世は、教会までが発達する社会経済圏に巻きこまれていく状況の中で、思想の振子が「否定」から「肯定」の方向へと畏る畏る揺れ動きながら、あるべき経済の位置を手探りした時代であったといえよう。しかしやがて、世俗化の機運と科学技術への興味が、西欧社会の一つの層から他の層へとひろがり、ついに経済学における「否定」の壁が総崩れとなる時代がやって来た<sup>8)</sup>。そして宗教も哲学もそれを追認するのに大童となった。未曾有の「経済時代」が始まり、そうして新たに構築された経済学はこの時代の司祭となったのである。「経済時代」の青年期、思想の振子が未だ「肯定」の極限を指すまでに至らないずっと以前に、わがジョン・ステュアート・ミルは最もおもだった司祭たちの間から現われ出て、この振子の位置の行き過ぎを懸念し、もっと「否定」の側に戻すように訴えたのであった。それは彼の時代が受け容れない異端であり、したがって一種のユートピア思想として以外には認められなかった。しかし20世紀の70年代のいま、彼が静止状態論で開陳した思想は、振子を大きく「否定」の方向に押し戻して人間の実存の究極の問題との関連において経済のあるべき位置を再び探ろうとする、現代の新しい「否定」の経済思想の真のさきがけをなすものであることが明らかであるだろう。のみならず、それは遠く経済思想の歴史におけるインド的、ギリシャ的、キリスト教的「否定」

の系譜につらなっていることが知られるであろう。現代とは異なる根拠からではあるがひとしく停止の必然性の認識から展開された、ミルの静止状態論における当為論は、この意味ですぐれて現代の思想であると共に、経済との関わりにおける人間の永遠の問題に相渉っていると言えよう。

1) Schumpeter, *Op. cit.*, pp. 1201-1202.

2) ここに経済的なものの低さを認める思想とは、少壮の西田幾多郎が次のごとくに書いた場合の思想と符合する。「世の中には終日衣食の為に奔走し、単に物質的存在の為に汲々として一生を没し去る者が幾億万人あるかも知れぬ。此等の哀れなる人々は如何に生きべきかと考える余裕もなくして唯生きる為に生きたのである。此の如き世の中で人生の価値を論ずるなどは甚だ贅沢なる者であるかも知れぬが、この物質的生命というものが左程に大切なる者であろうか。心を苦しめ身を役して五十年の飲食をつづけ、其結果は焼いて棄つべき臭肉を何十年か維持しまた子孫を遺したまでであって、而して其子孫が亦同じ無意味の生活を繰返すものとすれば何んと之より馬鹿らしき事はあろうか。」(『西田幾多郎全集』別巻Ⅱ, p. 62.) これを本節(1)註 3) におけるミルの記述と比較せよ。

3) Alfred Marshall, "Mechanical and Biological Analysis in Economics," *Economic Journal*, 1898. 山田雄三訳 (マーシャル『経済学選集』1940, p. 256.) による。

4) ミルは、われわれのすでに見たごとく、その本質において啓蒙主義の子であった。しかし19世紀を通じて、彼以前のケルケゴールや彼以後のニイチェに見られるように、時代意識は一層深刻になった。そして今世紀にお

ける二度の大戦、共産主義革命の実現さえ、人間の道徳的将来に対する明るい希望を回復させるようなものではなく、啓蒙主義は遠い過去のものとなった。ミルの次の言葉ほど、彼が合理的啓蒙主義者であることの制約をわたくしに感じさせるものはない、「つまり、人間の苦悩のおもな根源はすべて、人間の配慮と努力によって大部分——その多くはほぼ完全に——克服できるのである。」(*Utilitarianism, Chap. II.*)

5) E. F. Schumacher, *Small is Beautiful. A Study of Economics as if People Mattered*, 1973, Abucus edition, pp. 44-51. (邦訳、『人間復興の経済』斉藤訳, pp. 40-46.)

6) 古典古代におけるギリシャがそうであった。そこにおけるギリシャ人の労働観と彼らが経済担当者たるメトイコイと奴隷に付与した地位は、古代ギリシャ文化の栄光に何を加えるであろうか。

7) *Principles*, Bk IV, Chap. VII. ミルの功利主義への利他的要素の包含に伴って彼が基本的に私有財産制に基づく資本主義を拒否し社会主義に近づいたことは事実であるが、究極的には彼は決して社会主義者となることはなかったと言えるであろう。彼のいわゆる人間の改善の予備条件としての自由な個人と社会的多様性の存在の要請が、静止状態においても社会主義を採らしめなかった理由である、と私は考える。ミルは自由な個人を考え協同組織への希望を表明して世を去ったが、ミルの知ることのなかったテクノストラクチャーによって運営される大企業体制下の個人の運命を問うことは、彼によって現代人に課された宿題であろう。

8) 拙稿「アンドルー・ヤラントンの経済論(1)」学習院大学『経済論集』第11巻第1号, 1974, pp. 3-4 参照。